



バガヴァンの神性に疑いを抱く人々を確信させるやり方と、彼の神聖遊戯のあらゆる物語は、どれもユニークで魅惑的です。スワミがお若い頃の、そのような出来事の一つをご紹介します。これはクップムファミリー（初期の頃からスワミと大変親しい関係にあった一族）のクリシュナ クマール氏による体験です。

私は私のバドリナートを見た！

1947年、背が高く頑強な、あごひげを生やしたサドゥー（苦行者）がスワミを求めてバドリナート（ヒマラヤ山中の巡礼地。ヴィシュヌ神の化身であるバドリナート神を祀る霊廟がある）からやってきた。そのサドゥーはヒマラヤで着手した精力的な苦行のおかげで、燦然と光り輝いていた。彼はマンディールの正面にあったサティヤバーマ寺院に行った。

当時、その寺院の周りには小さな石垣があった。サドゥーは石垣の上に座った。すぐに、スワミの人気を好ましく思っていない数人の村人たちが加わった。サドゥーは私を含めて集まった人々に、ヴィブーティ（神聖灰）や果物やお菓子を物質化した。サドゥーは挑んできた。

「おまえたちのスワミをここへ呼んで来い」

このサドゥーがプッタパルティに到着する前から、スワミは彼をマンディール

ルの中に入れないようにと帰依者たちに伝えていた。

翌日、私が外出していると、誰かがそのサドゥーに私がスワミの部屋に住んでいると言った。当時、私は若い少年だった。サドゥーは私を呼んだ。

「子供よ、ここへ来い」

私がそばに近づくと、サドゥーは命令した。

「おまえのスワミを呼べ。私は彼に会いたい」

私はスワミのところへ行ってそのサドゥーのことを話した。スワミは尋ねた。

「誰が彼のところへ行けと言いましたか？」そして、スワミは言った。

「そんなことはどうでもよろしい。自分の仕事に行きなさい」

翌日、私が外に出ていると、またそのサドゥーが私を呼んで、

「おまえのスワミに、私に会いたがっていると伝えよ」と命令した。

私はうなずいて中に入り、そのサドゥーが再び挑んできたことをスワミに伝えた。翌日、スワミは私に、そのサドゥーにバジャンに参加するよう伝えなさいと言った。スワミはホールで木製の楽器を弾いていた。サドゥーはホールの中に入ってきて、トゥルスィー マーダムの近くに座った。それからしばらくすると、スワミは私に、サドゥーに何曲かバジャンを歌うよう頼みなさいと言った。サドゥーは約一時間、バドリナート神に捧げるメロディアスな美しいバジャンを歌った。それらは魂を揺さぶるような素晴らしいバジャンだった。

その後、スワミは私にアーラティー（献火）を行うように言った。私がアーラティーを終えるやいなや、サドゥーは叫び始めた。

「私は 私のバドリナートを見た！」

上へ下へと飛び跳ねながら、サドゥーはスワミの御足に平伏してパーダナーマ スカーラム（御足への礼拝）をした。私はサドゥーのすぐそばにいた。サドゥーは私を引き寄せ、私を肩に載せて飛び跳ねながら叫んだ。

「私は 私のバドリナートを見た！」

それからサドゥーはサティヤバーマ寺院へ行って、そこに座った。彼は恍惚とした至福の境地にいた。サドゥーは私を呼び、自分は自分のバドリナート神

を見たのだ、と何度も繰り返した。翌日、サドゥーが立ち去ろうとしていることを私はスワミに伝えなければならなかった。このメッセージをスワミに伝達すると、スワミは「サドゥーにもう一日滞在するよう伝えなさい」と言った。

翌日、スワミはそのサドゥーをマンディールに呼び、御馳走を振る舞った。

夕方、スワミは私に、倉庫を掃除していた時に何か珍しいものを見なかったかどうか尋ねた。私はスワミに、

「大きな数珠玉のルッドラクシャマーラ（菩提樹の実で繋いだ数珠）と、古い椰子の葉の束と、木製のサンダルが一足入った箱がありました」と言った。

スワミはそのルッドラクシャマーラを持ってくるように言った。私はそれをスワミの許に持って行った。

サドゥーはスワミから 10 フィート（約 3 メートル）離れた場所にいた。スワミがそのマーラ（数珠）をサドゥーの方に投げると、数珠の長さは実際に長く伸びて、サドゥーの臍にまで達した。

翌朝、サドゥーは誰にも告げずに姿を消していた。

